

## 6) 食器製品の開発

藤 靖之・川久保 正行

大有田焼振興協同組合の陶磁器デザイン研究会において、平成 15 年度より共同で食器の開発を行ってきた。今回有田球形の器をテーマに、企画立案、形状設計等の指導、支援を行った。また 17 年度製作した襲(かさね)碗にあわせ、皿を開発し研究会に提案した。

### 1. はじめに

有田焼の売上減少が続くなか、要因として市場環境や生活様式の変化などが指摘されている。さらに、予測より早く人口が減少に転じており、市場規模が縮小していくことが懸念される。このような状況に対し、独自の方向性を持ち、それに基づいた製品開発を行うことが重要になっている。

食器市場は成熟分野であり、消費者からの具体的な要求を得ることは期待できず、供給側が創り提案する製品開発が求められる。この様な中、大有田焼振興協同組合の陶磁器デザイン研究会において、平成 15 年度より食器専門のアドバイザーをお願いし、当センターで企画、立案、形状設計等指導支援を行い、共同で食器の開発を行ってきた。今回有田球形の器 9 選をテーマに製作し、テーブルウェアフェスティバルに出展し、市場調査を行い、PR 活動がなされた。また 17 年度「碗(ONE) 襲(かさね)」をテーマに製作したが、碗の大きさ、セット物としたときの皿等について検討し、新たに追加製作を行った。これらは、有田商工会議所が企画された有田名物井の食器として採用された。

### 2 開発テーマおよびコンセプト

昨年に引き続き、アドバイザーに立原 潮氏を迎え、研究会員と開発テーマ及び開発品コンセプト等検討会(会議 14 回/年)を行った。この中で、現在どのような形、色、大きさの器が好まれるのか検討を行い、形は原点に戻り球状、大きさに関しては小、中程度の物で、シンプル志向にある家庭に向け、シンプルな器を提案すること。また、テーマとして『有

田球形の器 9 選』が決定した。

#### 1) 器のポイント

##### ・形

基本の形に戻るといふことで、球、円を意識し、手に持ったときしっくり馴染むラインを持つ器

##### ・アイテム

日常家庭で使うもので、碗、皿、鉢、湯呑等

##### ・大きさ

一般家庭で使われる大きさ(食器洗浄器対応)で、手の中に納まるもの、収納性がよく、薄手で品のある器

#### 2) 形状および加飾のポイント

##### ・形状

手に馴染むもので、持つというより包み込む感じのライン。手に持って邪魔にならない高台。薄手で軽く、重なりの良い形。大きさは手に収まるもの。アイテムとしては、飯碗、湯呑、大鉢、中鉢、小鉢、中皿、小皿、取り皿、土瓶/ポット。

陶土は天草撰上を使い、水コテ成形で伏せハマを用いて焼成が決定。

##### ・加飾

形状と絵柄のバランスを考え、白を基調として、シンプルな加飾で、料理との一体感を考慮し、色合い、構図、絵柄のバランスを考える。また、伝統を踏まえつつも新しい絵柄の展開を行う。

### 3 開発アドバイザー及びメンバー

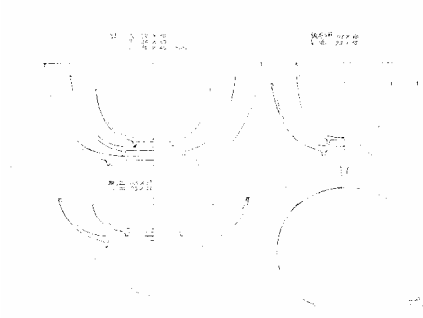
#### ・アドバイザー 立原 潮氏

・開発メンバー 親和陶磁器(株)、(株)田森陶園、(有)篠原溪山、(株)頼兵、(有)辻と製陶所、(有)畑萬陶苑、ヤマト陶磁器(株)、(株)宝光堂

## 4 試作

### 1) 形状及びアイテム

研究会での協議、検討を重ね、アイテムの決定、試作を行った。



形状・アイテム図案



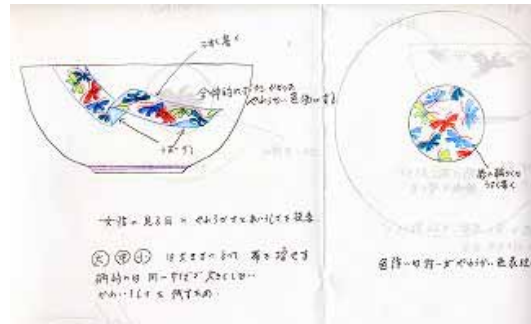
高台ラインの検討



有田球形の器9選アイテム

### 2) 加飾

加飾条件を基に各社からペーパーデザインが提案され、その中から今回のコンセプトに沿ったデザインを試作品に展開された。



## 5 試作品の検討

最終的な形状、加飾の検討を行い、絵柄、色合い、構図等を行った。

各社から提案された形状図案に対し、支援指導を行いながらアイテムを検討し、当センターで原型、使用型を試作した。

### 有田球形の器9選アイテム

飯碗	115 × 58
湯呑	75 × 65
鉢(小)	90 × 45
鉢(中)	130 × 60
鉢(大)	170 × 80

皿(小)	95 × 26
皿(中)	127 × 31
皿(大)	150 × 39

-1 土瓶(4号) 108 × 86

-2 ポット(4号) 98 × 86

和・洋に対応できるよう土瓶/ポットを採用し、1アイテムとした。



また料理と器のバランスを検証（形状、色合い、絵柄等）した。



最終的に絵柄の配置、色合い等微調整を行い、成果品として決定された。



## 6 展示会

名称 テーブルウェアフェスティバル2007

日時 平成19年2月3日(土)~12日(月)

場所 東京ドーム「温故創新~有田~」

テストマーケティングとして、展示会に出展し、来場者からの意見等を収集した。意見として、全体

的に持ってもらった感じでは軽い、使いやすそう(大きさ・容量)といった声も多かった。飯碗、鉢の低い高台については安定感がある、持ちやすいなど。

(手の大きい人は高台が邪魔せず持ちやすい、小さい人は伏せたときに取りにくいなど)飯碗はご飯を盛った時、薄くて熱そうだと意見もあった。

皿は価格も二~三千円台を中心に買いやすいこともありまた、ちょっとしたものを乗せるといった用途で中皿がよく出た。小ぶりな湯呑も女性には人気があった。

絵柄については、料理を盛った時の加飾のバランスを課題として、器だけではシンプル過ぎるといった意見もあったが、商品によってはすっきりしているという声もあった。ある程度の余白を活かしながら、しっかりした構図と色合いがあるものに人気が集まった。

- ・バランスのよい構図の配置
- ・伝統的な雰囲気がある(伝統をほどよく今にアレンジ)
- ・はっきりした線と色(白に映える)
- ・かわいらしい

価格帯については、千円後半~三千円台の小皿・小鉢・湯呑が中心で、買いやすく、場所もとらない、ちょこちょこ使えるものなのが人気であった。また、大鉢・土瓶・ポットといったアイテムでも五千円前後であったが、気に入ったもの(絵柄がしっかり品のある)は多少高くても購入されていた。





有田商工会議所で企画された、「有田名物丼」において、当センター、陶磁器デザイン開発研究会に相談があり、重ね碗、皿の提案を行い、採用された。有田町内の飲食店で、使用された。



## 7 「碗(ONE) 襲(かさね)」について

平成 17 年研究会と共同で開発、商品化をおこなったが、アイテムとして、皿、カップが必要で、また重ね碗の大きさで、もう一回り小さいサイズが必要等の意見があり、試作を行った。花形、八角反り形、八角形、四角形の碗に合わせた大皿、小皿の製作、花形、八角反り形については、小碗の製作、四角、八角形のカップの製作を行った。



## 5.まとめ

今回、有田球形の器 9 選をテーマに陶磁器デザイン開発研究会と共同で製作し、テーブルウェアフェスティバルに出展し、市場調査を行い、PR 活動がなされ、商品化された。また 17 年度「碗(ONE) 襲(かさね)」をテーマに製作したが、碗の大きさ、セット物としたときの皿等について検討し、新たに追加製作を行った。これらは、有田商工会議所が企画された有田名物丼の食器として採用された。